

言語文化学科



国語国文学 コース

● 国語国文学コースとは

日本語、および日本語で書かれたすべての文学・文献が研究対象です。いわば古事記・万葉集から若者言葉・村上春樹まで。言葉の研究は国語学、文学の研究は国文学ですが、言葉の意味がわからなければ文章が解釈できず、また逆に、言葉の用法を調べるために文学作品から例を探すと、両者は一体です。

講読・演習の授業では、一行の文章、一つの言葉や文字について、担当学生は何時間もかけて調べ、それを皆で解釈し、討論を重ねます。そうした中で、新たな発見や、調べることの楽しさ、研究の喜びが必ず感じられます。

本好きな人、中学高校時代に授業とは関係なく国語の教科書をどンドン読み進めていた人、国語の先生になりたい人、マニアックな人、とことんのめり込む人にオススメです。

● 先生の研究

近代文学が専門です。近代は明治から現在までですが、主な研究対象は芥川龍之介。また近代文学と、講談本などの大衆文芸の関係についても研究しています。本学の初代学長・恒藤恭先生が芥川龍之介の親友だった縁で、本学には芥川の直筆書簡など多くの貴重な資料が保管されており、その研究もしています。

研究方法は、作品の成り立ちを探ること。できるなら大正時代にタイムスリップして芥川の書斎をのぞき、創作過程を見てみたい。それができない代わりに、残された原稿や草稿、文献を調べます。目的は、優れた作品を後世の人々にも読める状態にして残すため。「源氏物語」を今読めるのは、物語に魅せられた人々が研究してきた約千年の蓄積があるから。私も「羅生門」を千年後の人々に読んでもらうためのお手伝いがしたいのです。



准教授 奥野 久美子 先生

● 学生にインタビュー

○コースに入ったきっかけ
高校生だった時点ですでに国語学や国文学に興味がありましたが、歴史や教育学にも興味があったので、入学後一回生の時に様々なコースの授業を幅広く体験的に受講しました。そのうちに、自分には国語学や国文学が最も合っているのだと分かったので、国語国文学コースに決めました。

○自身の興味
現在の僕にとつて特に興味深いのは近代文学です。ひとつひとつの表現などももちろんですが、筆者が自身の身に起こった悲しいことや、苦悩する内面を小説に反映させて、それを当時の読者が楽しんで読むといった対照的な構造なども面白いと感じます。

○コースの雰囲気・特徴
ある日、僕が共同研究室で設備の使い方が分からなくて困っていたら、先輩の方が声をかけてくださいました。同級生の人からもそういった話を聞くことがあります。そんなふうには皆さんが親切なので、少しおかしな言い方かもしれませんが、行き詰まることを恐れずに勉強に励むことができる雰囲気だと思います。



3回生 秋田 維吹 さん

● 教員紹介

丹羽 哲也 教授 Tetsuya Niwa
日本語の意味と文法。普段使っている言葉がどのような仕組みでできており、それが過去から現代までいかに変化してきたかという研究。『日本語の題目文』(和泉書院、2006)

久堀 裕朗 教授 Hiroaki Kubori
近世文学・演劇、主に人形浄瑠璃(文楽)史の研究。共編著『上方文化講座 義経千本桜』(和泉書院、2013)

奥野 久美子 准教授 Kumiko Okuno
芥川龍之介など大正時代の小説。特に大衆演芸からの影響について。『芥川作品の方法』(和泉書院、2009)

山本 真由子 准教授 Mayuko Yamamoto
中古文学、おもに漢文学・和歌の研究。「源道済の詠紅葉蘆花の和歌と序をめぐって」『国語国文』86巻4号(2017)



小林 直樹 教授 Naoki Kobayashi
中世の説話伝承文学。とりわけ現在は、通世僧の文学世界を中心に研究を進めている。『中世説話集とその基盤』(和泉書院、2004)

そのようなことがわかりやすく書かれている本はないかと、本コースの先生方に相談して、平安朝文学を研究している山本真由子先生から、この本を教えてくださいました。奈良時代から平安時代初期(八世紀から九世紀)までを研究対象に、当時の日本人がどのようにに外国語と付き合ったのが書かれています。外国語の習得や通訳に関心のある人にもおすすめです。

● 卒論タイトル例

- ・ 成通卿 説話における蹴鞠の精霊についての考察 — 樹霊との関係を中心に —
- ・ 『うつほ物語』における朱雀帝の意思の継承について — 仲忠夫妻との関わり —
- ・ 一九六〇年代を境とした安部公房作品の変化

● 国語国文学コース オススメ入門書

『古代日本人と外国語 東アジア異文化交流の言語世界』(増補改訂版) 勉誠出版二〇一〇年刊

【著者】湯沢賢幸

【紹介】

日本語や日本文学は、その発生当初から常に外国の言葉や文学の影響を受けて成長してきました。そもそも漢字自体が中国から入ってきたもので、それを崩して「かな」ができたわけですね。日本文学も、近代以前は主に中国文学(漢詩・漢文・仏典・明代の小説など)の影響、明治以後は西洋文学も加わり、外国の影響なしには考えられません。十六世紀の外国人宣教師たちが編んだ辞書などから、当時の日本語を研究することもできます。「国語国文学」といっても、日本のことだけを研究するわけではないのです。